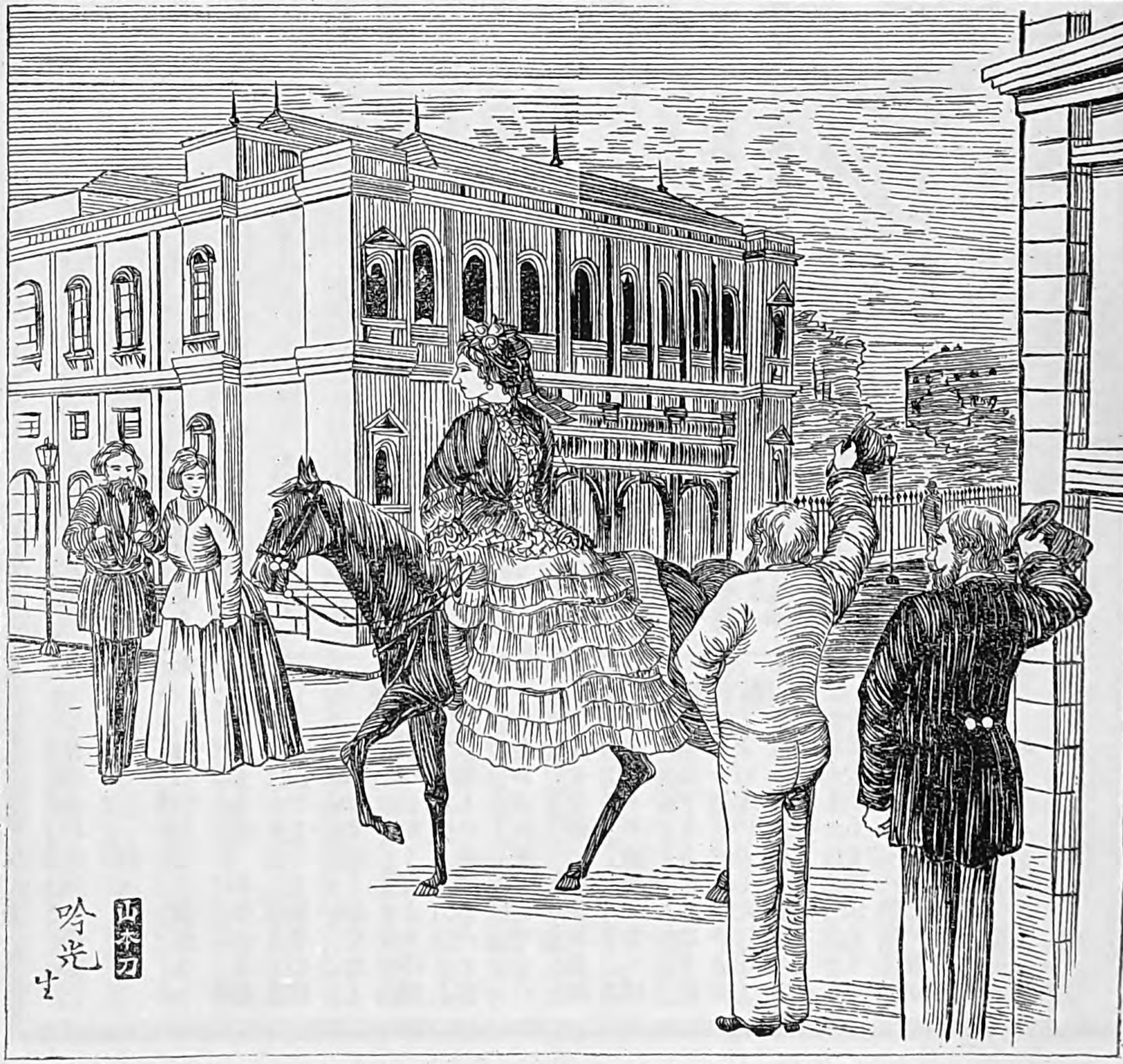
(英和語羅馬字對譯挿入)
A translation to the English from the Japanese contained.

女學雜誌

驛遞局認可　明治十九年三月六日　毎土曜日發兌　第拾二號



此の繪の說明ハ本紙中に在り

The Engraving illustrated in another page.

東京京橋區南鍋町貳丁目拾壹番地　發行所　績文舍

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

表書說明

（世界第一富豪の婦人）

人生れて婦人の身となる事なかれ百年の苦樂他人に據るとハ唐の伯居易の吟し名句にして舊天地に在てハ吾も人も賞そやせしが開明の今日に至りて男女同權及び女子にして戸主とならるゝ時勢に及んでハ亦た舊時の價直を保つと能ハず況てや斯る婦人の顯ハれて價直なきを證するあるをや此世界第一の富豪なる婦人とハ南亞米利加智利國の人にて名をドンナカウシノと呼做し他人ハ云に及ばず婦人も自から其富の幾干なるやを知らずと而して其重なる財產ハ土地〇家蓄〇鑛山〇家屋〇船舶等にして之より生する利益の外に南亞米利加に於て採堀し得べき限りの石炭山ハ悉く一手に握り是より生ずる利益のみ一ヶ月一万六千磅（我が八万圓）に至ると云ふ殊に此婦人ハ商賣の方法に妙を得たる人にて石炭を堀出して之を市に運ぶに一噸に付き五シルリング六ペンス（我一圓三十七錢）を費やし之を一噸凡そ三十シルリング（我七圓五十錢）に賣拂ひ凡そ五倍の利益を得る由なり尤とも此婦人が石炭業に巧みなるハ幾分か其の礦業の監督者たるスコットランド人等の智惠を假りるならんと云り此婦人ハ年齡四十五歲バかりの寡婦の身なれど自から再たび所天を迎へ又ハ人に嫁すを好まずと語れりとか去り乍ら男子との交際を全たく好まざるに非ず先つ年合衆國の軍艦が同國バルパライソ港に到りし時同艦の士官一同を招きて一週間ほど其家へ止宿させたり又此婦人ハ馬に乘るとを好みて常に馬上にて諸方を徃來すると云ふ智利人ハ一般に此婦人をモントクリスト伯爵夫人と稱へて深く尊敬するとぞ實に世界一大福長者の婦人と申すべし

（二月廿五日改進新聞）

記事

〇在原業平東下りの圖

任天居士

むら消のこる高根より煙りふき。かすめる松のほのぐと田子の浦ハに晴てゆくかなたに髮みしかく殿上人の旅装束してやなきバて擔きたる從者を具せしハ是ぞ在原の中將が勅勘によりて陸奥の方へ歌枕に下りたまふなり都をば春のあしたに出てわあめくと呼なる秋風の吹しく末に八十嶋に着く道々の記ハ卿が一世の材料となりならん

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎女學叢譚

○書訣辨解一班

成瀬大域翁

舍友任天居士が此頃夫の御物を認ためて美研の恩賜を得し書家の大家成瀬大域翁を訪ひ話次に翁が嘗て發明せし前人未發の書法の一班を得たれば習字する者の爲に和らげて之を記さん

古人曰く諸〻の技書を以て上と爲す是を以て人をな之を學ばさるはなし然れども其法を會得せざれば永年辛苦すると雖ども遂に其妙に達するとを得ず。天地萬物法あらざるはなし況てや書をや苟且にも其法を得ざれば義獻の堂（王羲之獻之の地位）といへども豈かたのらんや但だ法に正しきあり邪まなるあり未發なるあり是を以て惑ひ易し是を學ぶ者は牛毛の如く得る者は麟角の如き所以なり其正しき者とは何ぞや天然理に適ふ規則に循かひ諸体の格を正しくするの謂なり其邪まなる者とは何ぞや其規則に由ずして格の正しからさるの謂なり未發とは何ぞや古への書家の未だ究めざる書法を謂なり而して其正しき格を作の法は如何なるぞと云に唯一理なり一理より分れて二と爲る第一執筆を本とし（即ち撥鐙法是なり古今誤解多し或は雙鉤の改稱とし或は執筆の圓形とし或は燈火を挑くるの義とし或は飛騰の勢とし或は指頭に把と云ひ或は八字訣となし更に一定せず）第二字畫を末とす（永字八法是十二法の類なり）古へより書の論多しと雖ども只だ枝葉の說のみにして其本根なる執筆る究理の說に至りては誠に稀なり唐の僧懷素はじめて撥鐙を說く即ち人の馬に乘り鐙を幷びて相犯さゞるが如しとあれども語幽邃して悟り難く古今の解釋判然とせず故に以て未解と爲せり唐の長史より後ち撥鐙雙鉤同し義に解せしや同じく李華に至り運用を附し始めて（截拽）の二字訣を作る同じく陸希聲（擫押鉤揭抵）の五字訣となし南唐の李煜）擫壓鉤揭抵導送）の七字訣と爲し元の陳繹曾に至り（拒）の字を加へて八字訣と爲し遂に永字の八法に配せり輕信して之を看ば理を究めたるに似たりと雖ども是また牽强附會の說にして撥鐙の深意に非ず是れ懷素が淵源を悟らざるを以て支流の混淆に渉り却つて天然の至理を失なふ是故に唐より以後眞書を能する者次第に少なく行草尤とも枉態多し唐より以前の名家の書論少なしと雖ども自然の正法に適ひしが故に書態自から神彩あり書を學ぶ者指法の說を究めんと欲せば細大の諸体を試書し其得失を辨まへべきなり指法尤とも緊

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

要なれども古人ハ唯だ撥鐙を本とし或ハ千鈞を擧が如く或ハ雙鉤或ハ實指虚掌等の說有のみ想に撥鐙ハ書法の奥儀秘訣なるを以て懷素も之を吝みて傳ざるが故の然り而して余不敏と雖ども此技に從事する十數年仡々焉として解し難きに苦み辛楚を嘗むる數年にして豁然として大に悟入するを得たり（未完）

◎女子に猛省を促かす（承前）　富春漁夫

碩學ヘンリー、ファヴル氏の曰く善く婦人を養なひなさバ吾々の必らず自由の民となふんと

又我社會の經濟書に於て人の母たる者の備ハれハ人或ハ内職するの宜しからぬを論じ之を停止せんことを慫慂ものあり去りながら下等人民の今の有樣に由れば既に之を以て一般の風習となりしが故に如何に理道ハよきも之を停止することを得るや否やハ知れざるなり我儕の考ふる所ろにてハ嫁入せし婦女の工業塲に入るを停止する規則ハ恐らくハ我子孫數世の後に至らされば能ハざるならん假令よく其時限を短かくすることあるも其所天が酒に酖り酒樓に通ふことと惜むべき光陰を空しくするとの惡習を改たむるにあらざれば決して婦女を制して停止するの日を見ざるなり然し乍ら此二條の改革ハ實に學問上の改革よりも尚急にすべき事柄と思なり學者或ハ此事情を以て迚も改め難しと斷言するハ無理ならぬ言分なり。我社會に改革を行なひて一同に幸を得る事ハ願くバ一般に進歩よりせん事を肝要とするなり然るに一の論者が人情と公利とに基つき遠慮なく一令を下して人の母たる者ハ工業塲に入ることを禁せんと性急に言ん然れども亦左の數條の疑問を設けて其說に抵抗ものなきに非ず曰く第一工人の惡習工業塲の陋俗及び婦女の敎育よろしからざるが爲めに人の母たる者をして他の業に移らしむるが如きハ一令を下して人民を束縛するの害よりも多からずと爲す者ありや第二年久しくなせる仕事を俄かに止られたる婦女が又俄かに家の始末をするに適ふべきの第三人の母たるの職を盡すに於て相應なるや不相應なるや若し不相應とせば是より改ためて何の仕事をすべきや第四暇の爲にのらぬ事を巧らまざるやと我儕の見込にてハ一旦其風俗を正さすして直ちに嚴しき布告を爲さば却て善をなすもの少なく不善を爲す者おほくして役人もまた之を如何ともすると能ハざらん是れ尚ほ暗夜の道を失なへるが如く進退きハまる場合に至らんのみ然るに之に反して若し敎育の進歩に由て其布告にて停止せんとする惡風を止すれば前にて所謂禁令の如きハ自のふ無益の者と相成べし

（以下次號）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

詞花古今集

富春漁父撰

○征東將軍藤原忠文卿道の記

名にし近江の湖の波も長閑に和ぎたり霞にくもる鏡山春の影をや寫すらん勢多の長橋うち渡り弓手に見へしハ三上山昔し孝靈天皇五年に富士の高根ともろ共に一夜に涌出せしとかや旅の疲れに皆人の老蘇の森の下草に萠出にけり若菜つむ愛智川越て行末の多賀の宮居をふし拜み小野の宿より打つゞく番場醒が井柏原不破の關屋の荒殘るまばらの檐を洩る雨に笠きてもゆく美濃くに洲俣川の川隈も瀨々の浪をと靜かなり尾張の地にも入ぬればまだ如月の昨日今日寒返りたる中天も此ハ熱田の御社忝じけなくも御本地ハ倶利迦羅不動明王の擁化草薙の寶劍なり日を重ねつゝゆく程に故鄕ぞをく鳴海がたまだ數々の浦山を今日ぞ始めて三河の國彼の在原の中將の遙々來ぬると詠じけん澤邊に生る杜若それは戀路の化名にて東の果に下りし人我ハ賢てき勅により朝敵を拉ひしぐ猛き心の矢作川雪かとまがふ鷺坂や若紫の藤川より紅葉ならねど赤坂や重なる宿り四ッ五ッ一ッ二川越ゆけば此ハ何國ぞ遠江濱名の橋の橋ばしら朽てくちせぬ武士の其名も今ハ高師山天龍川を打渡り小夜の中山はや過て朝旦のつゆに五百歳の齡を延し菊水も同し名に負ふ菊川の流れを汲て尋し嶋田藤枝岡部より宇都の山邊の現にも夢にも人に逢ぬなる蔦の細道わけ越て手越川原を今朝みれば霞の衣織かゝる倭文機山に春の來て晩鐘むしき夕げしき日數積りて二月十五日駿河國富士の裾野に着きたまふ

○詠㆓王昭君㆒哥　　村田春海

雪まじりあられ乱れて夜もすがら北ふく風のあらましき夜床の上につくづくと枕そばだて來しかたを思ひいづれば人の世ハゆめなりけりな賤たまきいやしき我も宮姬とかずまへられてをすのうちに冊れし世ハあや錦そでをかさねて白玉をあづらにしつゝ眞澄鏡みる面影のかくはしき花の笑まひをわれながふ我とたのみて大君の惠の露もあまねくハもれじとこそハ思ひつゝありける者をさかなきや筆に任する寫し繪のあらぬそさびのいつハりを正しもあへぬうきふしハせんすべをなみ云しらぬ國の境に遙々といてたつ道とおきそはる袂のつゆのきえかへり引とゞめたる駒の上にしばし彈なす四の緒の絶ぬ恨みをはるけなん世こそしられぬ惜からぬ命と思へど塵の身のちりも失なで春たてど花もにほはず秋きても紅葉も見えぬ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

荒山の岩がきこもるふといほに我にもわらでいたづらに年ハかさねつ思ひきやともかよハぬ國人をつまとむびで弱女の趣ゐもなれぬ皮ころも袖さしかへてもろねせんとハ

反歌

はるの日の光りもうときき古塚にくさのみとりやいかゞ遺せる

◎歐米女學の枝折

○慈善婦人の祝詞　（承前）

拯月嶺風樓重譯

阿鶴姐阿龜姐に云ふ貴女ハ一番背が高きゆゑ最初の慈善婦人に御成なさるべし私の背の高さハ貴女の次でありますから陪審官となります他の方々ハ下坐の方へ御列びなさるべし私ハ其中央に立つべし阿龜姐ハ上坐に御立なさるべしと而して又云ふ皆さん全たく相列びたれバ是より相倶に慈善婦人を禮拜し給ふべし是に於て衆女阿龜姐を禮拜それば阿鶴姐又云ふ

此の慈善婦人の玉座に居たまふ有様ハ丁度我皇后の宮に似させ給へり貴女方ハ一同に頌詞を申し上て去り給ふべし

此詞を聞て衆女迭々陪審官の前へ進み出で其耳元にて密かに頌讃の詞を云ふ陪審官ハ一々之を石盤に記し畢り而して曰く善のな皆さん悉く祝し終られたり由て私ハ之を慈善婦人に告け參らすべしと乃ハち石盤ゞ書し詞を讀あぐ

夫れ慈善婦人たる者ハ最とも好き性質に候なり

阿龜姐曰く此の詞ハ阿粂姐の作なるべし

阿鶴姐曰く否々阿米姐の作でありますゆゑに貴女ハ一罰を受らるべし

阿龜姐曰く如何にも承知致しました私ハ罰を受ることを望ますゆゑ一罰毎に科料として此花釵を差出ます乃ハち今日の科料として此の薔薇の釵を差上ます引つゞきて後のを讀給ふべし

阿鶴姐曰く或方ハ慈善婦人ハ甚はだ穎明の眼を保りと云り

阿龜姐曰く是ハ阿仙姐の云ひし所なるべし

阿鶴姐曰く否々阿里姐の作る所ろなり貴女又一罰を受らるべし或方の詞に慈善婦人ハ美麗き衣裝を保りと

阿龜姐曰く其ハ阿六姐の詞ばなるべし

阿鶴姐曰く仰せの通り阿六姐の作なり。或方の曰く慈善婦人ハ和歌をよく讀ることと

阿龜姐曰く是ハ阿島姐の頌詞なるべし

阿鶴姐曰く否々阿辰姐の云る所なり貴女ハ第三の罰を受られべし。或方の曰く慈善婦人ハ女學雜誌へ好き投書をなさ

Original from CORNELL UNIVERSITY

るゝと
阿龜姐曰く其ハ必らず阿綱姐の詞ばならん
阿鶴姐曰く否々阿律姐の言なり貴女ハ第四の罰を受らるべべし。或方の語りしに慈善婦人の書物を讀時ハ誠に丁寧にして一々記憶するとを勉むと
阿龜姐曰く其ハ阿豊姐の辞なるべし
阿鶴姐曰く否々此ハ阿兼姐の云ふ所なり又一罰を受らるべし。或方の話しに慈善婦人ハ裁縫するに其針目が誠に細やかなりと
阿龜姐曰く是れハ確に阿勇姐の作ならん
阿鶴姐曰く誠に仰せの通り阿勇姐の作なり。或方の說に慈善婦人ハ凡ろ遊戯の衆藝ハ悉く御存じなりと
阿龜姐曰く其ハ阿霜姐の作られし所なるへし
阿鶴姐曰く否々是ハ私しの作る所にして此石磐の末へ記せし頌詞なり左り乍ら貴女の當し數ハ二つなり而して罰ハ六ツに及べり故に二ツ差引し殘る四ッ差出し給ハバ貴女の役ハ相濟につき今度ハ私しが慈善婦人となり阿兼姐ハ陪審官になり給ふべし　（終）

○ブッサルッの解

本誌第八號のフッサルスの解ハ左の如し

（　）七即ハチVIIノ字ノ形チヲ推テ知ベシ

（　）金錢ノ數ハ偶數ヲ以テスルヲ要ス假令バ之ヲ八ト爲シ銀錢ヲ奇數トシテ三トナスノ類ナリ斯シテ後チ其一人ニ語ルベシ其右ノ手ニ握ル所ノ數ニ加フルニ他ノ偶數ヲ以テシ且ツ他ノ奇數ヲ以テ左リノ手ニ在ル所ノ數ニ加ヘヨト而シテ之ヲ合幷シテ其總數奇ナル時ハ金錢右ノ手ニ在リトス若シ偶ナル時ハ即ハチ銀錢ハ右ノ手ニ在ルヿ明白ナリ此事ヲ一際巧ミニ知ラントナラバ加ヘシ全數ヲ問フニ偶ト奇トカト云ヲ用ヰズシテ直ニ其全數兩分スベキヤ否ヲ以テスベシ若シ分ツベキ數ト云フ時ハ偶ナル事明白ナリ

◎内外新聞

◎宴會の心得　去る二月廿五日の讀賣新聞に宴會の注意てふ事を掲けられたり事柄ハ最早六日の菖蒲に屬したれど後々の心得にもと抄書して告け參らせん曰く○來月三日（去る三日の事）に府知事渡邊君が内外の貴顯紳士を鹿鳴館に請待して盛んなる外會を催ほされ其の請待を受たる方々ハ孰れも夫人を同伴せらるゝ由なるが偖其席に列なる夫人ハ襠、袴を着用せ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

らるゝハ勿論なるべけれど多くの中にハ右の服ハ未だ用意のせられざるも有らんか然りとて斯る晴れの席なれば參會ハいたしたけれども常のはれ衣にてハ如何にやと躊躇ふ方もあるべきかと記者の老婆心より或る其の向の人に聞合せたるに此度のハ必ずしも裃袴に限り申さず西洋服裝またハ表衣紋付・下衣白襟なら差支へなしされど縞の着物にてハ不体裁なりと云はれたり着物の事ハ右の如くなれど夜會にハ内外人の集ふ事なれバ男女共に行儀正しく擧止雅閑にして文明なる日本貴紳ハ斯くこそ有りけめと外國人に讃めらるゝ樣になしたき者なり堂々たる方々の羽織袴を着し或ハ燕尾服に黒の襟紐縞のシャッなどにて接伴員の注意により戻るもあり又ハ廊下に佇みて通行の妨げとなるも知らず大聲笑語して他を憚らず食堂に入りて立食を爲すとて狼狽先を爭ひ飽まで飲むなどの事ありてハ笑止とや云はん忌はしとや云はん歐米各國にてハ夜會にも夫々禮ありて苟めにも貴紳士たるもの食堂に入りてハ行儀正しく談話をなし飲食も僅か一片を喫し一盞を甞むるに過ぎず最と整肅なるものなりとぞ我國にて貴顯と敬まはれ紳士と稱へらるゝものが外國人の嘲笑を惹くが如き擧動ハ萬々有るまじけれども事の序に斯くハ記しつ

○誤つて子を殺そ　まだ年の行ぬ細妻方にハ往々ある事なれど寢乳ハ成べく起て飲せぬと大變が起りますと云ハ府下荏原郡　大森村白九十四番地の平民船乘渡世橋本佐一郎の妻おむら(二十三年七ヶ月)ハ去る九日の夜に豫て里子に預かりし京橋區南槇町十六番地の村田寅之助の長女お福(一年)に乳房を含ませて眠りし中誤まつて乳にて其口鼻を推し塞ぎ呼吸も止しかは何ぞ耐るべき忽ち息絶て死せしを目覺て後ち氣の附き大に驚ろいて醫者よ藥りよと手宛せしが遂に蘇生せざりしかば直に自首せしにぞ裁判のすへ東京輕罪裁判所にて本刑に一等を減じ罰金十五圓に處せられました

◎娼妓も我子の愛ハ同じ　根津の廓に名高大松葉樓に出稼せし幻　てふ游女ハ本名石川田鶴と云ひ今年三十四五なるが去る同家を忍び出て何れへかへ逃走りしもゐ同家にてハ種々手を盡して探たれど遂に在所の知れされバ今ハ是までなりとて打捨をきしに此ほど東海道岡部宿の郵便局の印ある手紙が同家へ届きしもゐ之を拔き見しに

春とハ申しながらまだ餘寒去りやらず候へども其御許樣ますく御機嫌よく入せられ御目出度存じ上まゐらせ候然れバ私し事長々御厄介に相成御禮ハ筆紙に盡し難く明暮れ拜し居

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

候へども御存じの通り私しも昔の石川田鶴でなく一年一年に取る年もゑ名馬も老れば何とやら勤の出來のね其上に是といふ御客もなく此身に餘る大借に迚も何時まで苦界に居ても身の定めハ覺束なく御主人樣にハ申分けなき事ながら少しの目的を當にして昨年の冬無斷に樓を拔出し嘸憎い奴と覺召しもあるなれど是非此三月下旬までにハ何とか致して御詫かたがた借財の方も付けい心得よて種々心配最中なれど若し三月下旬までに何の音信もなき時ハ田鶴ハ此世に居らぬものと思召し跡よ殘せし娘の義何分願ひ上げ猶くれぐも時候お厭下されたく御見世繁昌ハ蔭ながらいのり

あらあらかしこ

二月　　石川田鶴より

松葉旦那樣

と認ためありしと此ハ遊女の常なる欺ハりとか知らされども書中に娘とあるハ同人の實子にてお愛と云ひ本年十歳になる者にて今に松葉樓にて養育して居るよしなるが此だけハ親の情合にて欺ハりならぬを推するに足ます

◎東京師範學校卒業生　同校よ於て去月廿七日修業証書を授與せられたる女生徒とハ左の如しと三月一日の官報に見ゆ

(東京)高田から　安藤みつ　高嶋から　藤沼のぶ　柘植くり(熊本)尾藤はつ　(京都)牧野ゑい　(高知)嶋田かふ　(福岡)宗てい　(岐阜)女子師範學校卒業生上田たか　齋藤ちよ　(德嶋)前田まさ　(兵庫)須田きよ　(北海道)齊藤とめ　(秋田)京極しけの諸子にて又先月一日より二十三日まで東京府に於て行ひし小學校教員學力撿定の及第せし女子ハ十五人なりと

◎和英語羅馬字對譯 (いろはかるた)(羅馬字はなし)

(和)　樂あれば苦あり

(羅)　Raku areba ku ari.

(英)　As there is happiness, there will also be sorrow,

故ニ ソコニ アル 樂 ガ ソコニ ブラウ 又 アルデ 苦ガ

四 一 三 二 五 九 六 八 七

Ura no mame batake ga taisō areta. sore dewa karasu darō.

うら の まめ ばたけ が たいそー あれた それ でわ からす だろー

Dōraku musuko ga jōro-ya no kado wo de tara karasu ga ahō! ahō!

どうらく むすこ が ぢやうろや の かど を でたら からす が あほー あほー

Sensei watakushidomo no kame wa mairi masen ga iya inu.

せんせい わたくしども の かめ は まいり ません が いや いぬ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎内外烈女傳

◎清少納言の才敏

清少納言ハ肥後守清原の元輔の女にして才學とも世に名高く一條帝の時皇后藤原氏に仕へ奉りて大に寵愛せられける嘗て皇后雪の降し朝御前に侍べる女官を顧り見たまひ香爐峰の雪ハ如何ありなんと仰せられければ少納言ハツト起て御簾を褰げたり其意ハ唐の白居易の詩に香爐峯の雪ハ簾を褰げて看ると云る句あるが爲ぇ斯なしけるなり此を聞く者みな其敏捷を稱へ皇后も特ぇ才華を賞せられて内侍の官に昇進せしめんとまで御旨ありしが故ありて果さず年老て零落家に在しが其家傾むき軒荒て月を漏すほどの貧窶の樣なりければ若殿上人等ハ其處を過る毎に笑ひはやして蔑しければ少納言ハ破の簾の間だより若殿ばら古へ駿馬の骨を買ものさへあるを知らざるやと云しに笑ひ蔑せし者ハ之を聞て大に愧て又云ざりしとかや少納言の著ハす所ろの枕草子ハ今なほ世に行なれる

◎銀釵を賣て學校建築費に供へし下女

小學校の必用なるを知るも建築費の金話に及べバ首を傾むけて思案する世柄なるに下女の身として衆に先たち銀釵を賣て費用の内へ喜捨せしハ世にも得がたき話にこそ周防國熊毛郡室積村の士族守田英淳が下女のふじ女ハ同村に未だ小學校あらさりしとき同地の取締役ならびに教員等守田方に集會して建築費の事を談じたるに何れも思案なけ首して話しの更にまとまらさるを側ハらに侍りて聞ゐたるが資金の爲に貴重の學校の建ざるハ如何にも嘆てき限りなり責てハ大海の一滴ぇも心ばかりを供へんとて常に大切にする銀釵一本を持出て賤しき妾が寸志に候あひだ何卒費金の内へ加へ給ハるべしと恐る〳〵申したるに滿座の者ハ目と目を見合せほと〳〵其篤志を感賞し之を承知なしければ之ぇ勵ませられて英淳の妻りうより銀釵二本喜捨せん事を請ひ之を聞つたへて同村の副戸長たる熊野尚輔の妻より金二圓を寄附したるにぞ他々も皆之に奬勵せられて追々書物を納め金圓を投る者出して遂に學校建築の功を奏したりとぞふじ女か銀釵貴ときにあらずと雖ども學校なるに及んでハ其銀釵の貴ときと金剛石ぇ勝る者あり世の學校費に躊躇る人請ふ此下女ぇ笑ハれ給ひぞ

◎清水長左エ門尉の母の文武

婦人の勇なる者古今巴御前板額を推ども恨むらくハ文に乏し獨り清水氏の母に至りてハ文武兼たりと謂べし一日母某氏山

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

上の社よ詣でんとする途中米を負し牛誤りて後脚を断崖に墜しされば牛童ハ遽て驚ろき其負ふ所ろの米俵を解て助けんとせしが牛の谷に陥ゐらん事を怖れ手を出しかねて躊躇進退きハまりたるよ見る者ハ皆氣の毒に思ふハ思へど救ハん便なく手に汗を握りて如何なりゆくやらんとハラ〳〵そるを母某氏ハ其慘怛の様を看過に忍びず急に轎より下り雙手を牛の角にかけヱイヤと引ば牛ハ米を負しまゝズル〳〵と上りたれバ衆人皆舌を卷て其勇力に服したりとぞ○左工門尉もまた母の血統を承て頗ぶる膂力あり勇武衆に超へ軍に從がふ毎に勳功ありしを以て往々傲慢の擧動ありければ母ハ常よ之を戒て曰く大丈夫たる者僅のに力を恃み先陣

百八十九

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に臨み自から敵を撃つ如きは是れ匹夫の勇にして大將の爲すべき事に非ず昔し楚の項羽は大木を抜き飛厂を睨み墜せし勇者なりしが戰破れて終に烏江に歿し漢の張良は靜默婦女の如くなれども籌を帷幄の中に運らし功を千里の外に立たり夫れ斯の如く良將は威ありて猛からず勢を以て人を侮どらず義を守り禮を執り人を憐れみ惠を施こし君に仕へて忠を竭し軍法武略を鍛練するを第一の務めとなすべし之に反し徒らに力を恃み暴慢無禮なるに於ては禍ひ必らず其身に及ぶべし汝少しく之を思べしと是より常に自から逍遙を禁じ閑居して書を讀み文を學びしに智謀勇略倶に秀ければ人々之に畏服せりとぞ

◎鈴木まろ子の心掛

幽栖の靜かに秋を送りけり。とは世と共に競はず亦時めかん事をも願はず只だ我心を友として自適するの意なんめり鈴木まろ子の心掛は此の俳句に適ふ者歟。丸子は磐城國棚倉の人にして温順の上至孝なり天性學びを好みて揚巻の頃より學に就き螢雪の辛苦は著しるしき功となりて嶄然頭角を顯はし人皆賞稱へぬはなかりけり去れば自からも光陰を徒らに失なふことなく人生の快樂は讀書文字の外なしと云ひて夏は日めもす冬は夜もすがら和漢の書を繙きて更に倦怠の氣色なし斯る心かけなるを以て宮寺の游山野山の消遙に友垣の誘ひ來るも事に寄せて之を斷はり往ず亦女子の最とも觀るを好む劇場なども風教を傷なふ脚色あれば淚を垂て之を嘆じ耳を蔽ふて聞さへ厭ひ忠臣義士の事蹟とあれば却て友を勸めて觀せしむ心術既に斯の如くなるも常に衣賞を製し賜はらんより書籍を購なひ給へてよ身には弊衣を纏ふとも心に錦をかざれとは古の聖の訓との聞はべるを更に容儀を修むるとを好まず只だ讀書の暇には花鳥風月を弄し詠出る歌も少なからざる中に十一年二ケ月の時幼竹を見て讀る歌に

若竹の淸き操はわれも亦ゆくすへかけてかはらしとぞ思ふ

是にて平生の心かけを窺かふに足れり目下女學勃興の日に當りて末頼母しき閨秀なりと或人の話しのまゝを記そとなん

女子の學ひ

○蟬丸の事

世に蟬丸は延喜の帝の第四の宮なり生れながら盲目にてよく琵琶を彈し給ふ其御姉に逆髮の宮とて有しは髮さかさまに生ひで給へり

[illegible]

延喜帝業障懺悔の爲にとて逆髮を男山に捨蟬丸を相坂にすて給ふ是に由て後世王坂と書し四宮河原の名あり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

博雅三位夜な〳〵逢坂に來りて蟬丸に琵琶をならふと云ふ。案ずるに三光院殿の御說に世人蟬丸を盲目と云ハ誤まりなり後撰集に相坂の關に庵室を作りてすみ侍りける行かふ人を見てよめる。これやこのゆくもかへるもわかれつゝしるもしらぬもあふさかのせき。とあり行かふ人を見てとあるにて盲目ならざるを知べし又延喜帝の皇子といへる說ハいよ〳〵誤りなり古今に此人の歌いれり延喜五年に古今集を撰べるとき醍醐帝わづかに二十三歲にならせ給ふを以て誤り知べし。無名抄に云會坂の關の明神と申そハむかし蟬丸（本朝遯史に云蟬丸ハ式部卿敦實親王の雜色なりよく琵琶を彈ず庵を相坂に結びて隱れすむ云々）そのわら屋のあとをうしなハずしてそこに神となりてすみ給ふなるべし。むかしふかくさの帝の御使にて和琴習ひに良峯宗貞良少將とてかよひけんほどの事まで松もかけようかひていみしくこそ侍れ（方丈記に云深草の帝の勅をうけて良峯宗貞せみ丸に琵琶をならふ）此說是なるべし然るに小世繼などに博雅三位木幡にすめる盲僧に琵琶を習ふとあるを混じて謬まり傳ふるにや博雅三位ハ延喜帝の孫なり時代大に相違せり又逆髮の事尤とも妄說なり國史小說紹運錄等にも見へず又逢坂四宮河原の事いよ〳〵非なり日本紀に仲哀天皇御宇武內宿禰追忍熊王遇于逢坂とあれば上代より逢坂の名あると知べし又小町の家集に四ノ宮うせ給へるにつとめてのせふくに。けさよりハかなしのみやの山のせやまたあふさかもあらしと思へば。とあれば延喜よりはるか以前に四宮の名あると明けし雍州府志に四宮河原ハ仁明帝第四宮人康親王の舊蹟なる故に號すと記せり（俗說弁）

◎かバ櫻

秋の園主八

世の人々多くハ淺黃櫻とかバ櫻とを一ツの物と思へり此ハ別〳〵の物にて薄黃色なるハいづれも淺黃櫻と云べし今樣の染色にあさぎ色といへるなり此ハあさき色に古へハ二色あり淺葱と云ハ薄青色にて水色とも白襖とも云ふ葱ハきと云物にてねぎの事なりねぎハ青く白みあり淺黃ハ前に云ふ薄黃色なり中古以來淺黃と淺葱と混じて一色と思ふ故に黃ざくら。かばざくらと云なり今の如く淺黃色と書ハ淺葱と書べき事なり又かバ櫻と云ハ薄くれなゐの花を云ふ河海抄にかば櫻とハ花の色うす紅なゐにてとさら艶なる花なりと云り源氏物語野分の卷におもしろきかば櫻の咲みだれたるを見る心ちす云々徹書記の說にかば櫻ハ一重櫻なり或ハ一重の薄くれなゐの艶なる花なりとも云り又古今榮雅抄に絹の色おもて蘇芳にうら薄色なる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

をかは櫻と云と云り又色目類抄にのば櫻表蘇芳うらおなじなど云り是等を以てかは櫻の色を考ふるに薄くれなゐの事あきらけし又朱櫻をかば櫻と云ふ説もあれど和名抄に朱櫻をハヽカ又ニハザクラ本草に櫻桃一名朱櫻和名波々加一ニ云爾波左久良とあり櫻桃はゆすら梅にて又庭櫻とも云ひ一名喜梅とも云ひ櫻には非ず歌などに賞して讀べきほどの物に非ず（未完）

◎女紅

○音樂の功能

近頃西洋樂器のピアノ。オルガン等を成べく用ゐて三味線などは廢すべしと云ふ説あり此れ記者の最とも贊成する所ろなり去りながら西洋樂器は如何なる功能樂しみあるや普ねく未だ云ひ觸さゞるが如し故に英書中より單簡なる功用の語を抄書して申さんに曰く凡ろ種〳〵の技藝の中に於て近盛んに英國に流行し數年の間に大に進歩せしは此音樂の藝に勝れる者はあらじ我諸都會及び郷里に歌謠の集會を設け樂器を玩用ぶ社を結び且つ龍動の水晶宮に於て奏する音樂を容易に聞くとを得るに至りたるは誠に此技の進みしをして特に速かならしめたる證據なり而して今時客席に於て最良なる音樂師の製作せし所ろの室中音樂を奏すると專ぱら流行せり其音樂とは室内に於て自から私くしに設け爲す者を云ひ寺院の奏樂又は衆人集會してなす音樂とは異なり殊にハイン（古代有名の樂工）モーザルト。ベートーベン等の樂の如きは實に家人の耳を悦ばせ且つ其感覺智力を増すとを得而して親族中の年若なる少女等此の樂しむべき技藝を習はんが爲に小集あるとに其少女の兄弟たる者閑暇に時に共に之を行ない一家一族中互に相親しみ相愛し感動するの情をます〳〵固ふするの利益は少なからざるなり云々とあり世の人に之を讀で三味線の功能と何れが多きや沈默して其心に問ひ給へかし

◎化粧のまき

眉毛の作り樣はいろ〳〵あれども顏の恰好によりて作り方かはれり短かき顏圓き顏には細く三日月の如くし長き顏又少し大顏には少さか太く作るべし餘り太きは賤しくして見苦しけれども顏の恰好に由ば一概には申しがたし細眉は可愛らしく太眉は少し怖く見ゆる者なり去りながら細すぎるもよろしからず其人の恰好に由べし其餘は圓き顏又は眉を短かく作るべし是は顏を長く見せんが爲なり。頰はりたるの又は下脹の顏は眉を太く作べし是は上の方を強く見せんが爲なり。細長く

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

俗に瓜實顔には目立ざる樣眉を少し薄く作りたるが恰好よき物なり。又眉毛と眼の間の短かきは少し下を剃あげ上より作りて中にて取けすべし。眉毛と目の間だ長きは上を少し剃さげ下の方へ取けすべし。(取けすとはくまとも云ふぼかすそ意味合なり)長き眉を短かくするには両方剃て取けし跡を白粉にてかくすべし。短かき眉は化粧したる後ち濕たる手拭にて眉の前後の作らんと思ふ所を竊拭ひ其處へコロップを火に燒き是にて徐かに薄く塗べし

◎群芳詞苑

明治十九年二月五日御兼題　野梅

主や誰言問がてら立寄ん梅咲野邊は過うかり鳧　郁子

年々に見人多く成ぬらん梅咲野邊に假屋建たり　正風

立出て若菜摘野の春風よ袖寒からぬ梅香ぞする　忠淵

春霞たち野の末のくぬぎ原此頃梅も咲交りつゝ　建通

思ひども心そのべに來て見れば霞の袖に馨る梅香　慶永

春の野の若菜摘よと來て見ば疎に咲り梅の初花　承昭

百草の枯野に一木さぐ梅の馨るも寒き春風ぞ吹　光勝

山端に雪は昨日の儘ながら野中の庵は梅咲に鳧　光尊

木本はそことも見ず霞む野に梅香送る春の夕風　壽子

鶯の聲におくれず匂けり巣立の小野の梅の初花　賢政

下萌の若菜摘んと來野べに嬉く梅の花の咲る　愛子

麥畑に開し野邊も一本の梅は殘りて咲匂ひつゝ　敦子

鶯の宿りと成りぬ冬枯の野中に立る梅の一もと　良子

うら〳〵と匂る野邊の朝霞分つゝ來れば梅咲に鳧　みち子

年毎に來て思ふ哉野司の梅咲陰に庵もあらばと　有任

手折と思ふ梢は皆高し主なき野路の梅には雖有　安斐

鶯の聲そる野邊に來て見れば偖社梅の花咲に鳧　通治

若菜摘野邊の梅枝咲初て子等が袂も香に匂つゝ　長延

○東京名所百首　任天居士

○宮戸川　(十一)

宮戸川あさる小あみにゆくりなく隅田の春をすくふすなどり

○回向院相撲　(十二)

立ならふすかたろ秋のにしきなれやりてものゝる木枯のころ

○愛宕山の月　(十三)

愛宕山みをろすすへの雲間よりもれてすゝしき秋のつきかげ

○皇城舊曰三千代田鶴舞城一　(十四)

鶴まひの千代田の城といつの代に今をはきてそ名づけ初けん

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

（十五）

○両國花火

よぶ聲のまた消ぬまに散らせて世のはかなきをつくる火の花

○墨水花朝　中西幹太郎　十五年六ヶ月

醉客相扶醉客還。長堤盡處見波山。宛然身似遊仙境。舟在櫻花春水間

評　一幅畫圖

○御伽草

○蟹の昔し譚

隣りの杢助どのモウ潮が干たと見へますチト穴を出かけやうでハ御坐らぬか。ハテ返事がないハ。モウ出られたろうな。去ば私しも出のけませうト横這に這だし。ハヽア杢助どの貴殿ハ早御出かけなされたナ。思ひ廻せば貴殿も拙者も先祖ハ平家の嶋村の未孫。氏も素性も御坐れども柿の種に焼飯を交換た粗卒より斯く浪々の流れ渡り甲らに似て僅の穴の住居に年寄て身に生た鋏さへ錆つひゝ疲体おふのた仕舞ハ漆のぶれの藥くらゐが終焉でごさらう何ト口惜しい義でハ御坐らぬか。

ハヽア返らぬ繰言御止なさひ葦芽の生る時節で御坐れば學校がへりの椀白子供に捕まいられ給ふな。サア泡を吹て責て心をお慰さめませうサア吹ませう貴殿も吹つくやれ吹ッくらを仕つらうぶく〳〵〳〵〳〵

◎大工

コレ貴様ハとんだ細工自慢をする男だが此わひだ釣て呉た。棚がモウ落た丈夫に釣なほしてくりやれ。ハテ落る筈ハないがと。又棚を釣なほし。サア〳〵是で大丈夫。モシ旦那これから物をわけなさんな

自慢高慢馬鹿の内とハ此等をや謂べき

◎章魚の泣言

若し岩の烏賊右工門どの貴様ハ大層墨を仕込で景氣がいひが私の様に年を取て壺へ片足かけてハモウ仕方がわりません況て此の不景氣で芋畑の稼きもならず何處へ吸つく宛もなく女房に子が一人私とも三人口で三八廿四本の足だから足袋履物でも容易なとでハない天蓋や藥鑵を賣拂ても足ないぽ〳〵しい。もし聞て御呉なさい先月も丁度足を二本喰てみました

少年老やすし心したまふべし

◎十號の考へもの〳〵解當の方ハ左の如し

（一）ハつ〳〵じ　（二）ハ大根　（三）ハにハとり

東京お春姐演　松香雪姐同おさき姐同おかく姐東京お京姐宮城仙台おつね姐

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

PUNCH

パ　ン　チ

○チョイとマア御覧わそハせ彼の方ハあんなに大きな体で居なから針が自由にならぬと見へて荷やつのへにして居ますよオホ、、、

○オヤ〳〵ろうで御坐いますねへ其くせあんな三味線ハ輕々としてゐますよ

○私しハ児供の時からふ裁縫がきらいで三味線ばかりチン〳〵やつて居ましたのふこんなに大きくなりまして針にハ困りますオホ重いととうしたふよのふうのウン〳〵

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎机の塵

◎日本製の文字

榊　掟　裃　峠　適　俤　迚　雫　凩　鑓　椛　梶
扨　嬶　畠　閊　込　辻　扒　扒

◎馬はぬれ

杜國が發句に　馬はぬれ牛は夕日の北時雨　と云ありなほざりに讀過しては其意味解しがたし此は古詩に胡馬嘶北風越鳥巣南枝と蓋し馬の性は健なり風に逆ふ牛の性は順なり風に順がふ馬の耳に風の喩の如くなり胡風は北風に逆ふ故に北時雨にぬれ牛は風に順つて南に向ふ故に夕日にあたる也諺に夕立は馬の背を分ると云ふ時雨は十月の夕立なれば此佳句の浮たるなり僅かに十七文字の内に古詩古諺の意を兼ね妙と謂べし

◎土用鰻

近江　苗村嶽東

土用の丑の日に鰻を食するは夏疲を療すが故なり殊に丑は土に屬す土用中の丑の日は兩土相乘すればなり此事古き慣はせにや萬葉集に。億良等に我ものまうす夏疲によしといふなる。。。むなぎめしませ。とありう。む。相つふず

和書講義

任天居士

愛着の源となるとぞ●厭離えつべし　欣求浄土厭離穢土と云て惑て道を厭ひ離さざれば心裡に浄土を見認かたしと●まどひのひとつ　迷の一ッなり　一念轉せば即ち煩惱も菩提なり故に惑の源となる愛着の離れ捨べしと●老たるも若きも

四十二章經に曰く佛言愛欲莫甚於色色之爲欲其大無外(注)愛欲過患義類多種障道長惡無甚女色と見ゆ老若の迷ひ多く是より出づ

されば女の髪すぢをよれる綱には大象もよくつながれ女のはけるくしだにてつくれる笛には。秋の鹿かならずよるとぞいひつたへ侍る。みづからいましめておそるべくつゝしむべきは。此まどひ也

●女の髪そぢ　梵網經に女の髪にて船をつなぐと見ゆ蓋し執着の繋ると云ふなり●女のはけるあしだ　美女艶婦が移り香のある足駄にて作る笛には鹿もおのづから寄きたると是れ又執着を再言するなり●みづからをいましめて　自警と晋そ朱文公の自警の詩に十年浮海一身輕。歸對梨渦却有情。世上無

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

文學士有賀長雄先生講述

○教育適用心理學　全八冊第一冊發行定價四十錢第二冊以下近刻

教育ノ基本ハ心理ニ在ルコト猶ホ醫術ノ基本ノ生理ニ在ルガ如クナルハ世ノ知ル所ナリ、故ニ文部省モ心理ニ通スルヿ教育ニ缺ク可カラサル資格ナリト公認セリ、然レ𪜈我邦此ノ學ノ良書無キハ教育社會ノ一般ニ憂慮スル所ナリ、無レ𪜈普通學ノ大ニ進歩普及セル外國ニ於テ著シタル書ヲ直ニ飜譯抄錄スルトキハ、必ス難深ニ失スベケレバ、我邦ノ事情ヲ酌量シテ新規ニ心理學書ヲ作述スルノ外無シト雖𪜈、此ノ事ヲ完クセンニハ、哲學論理ノ理論ヲ自在ニ措置叙列スルノ學識ヲ要スルカ上ニ、心理學ハ當今進歩ノ最中ニ在ルヲ以テ、歐米現時ノ學事ニ通セサルヲ得ス、新規ニ心理學書ヲ作述セシ者無キハ、此ノ難情アルニ因ルカ、弊店嚮ニ有賀先生ニ請テ如氏教育學譯註ヲ發行シタルニ、大ニ教育社會ヲ利セリトノ稱讃ヲ得タリ、故ニ今又氏ニ乞フニ心理學書ノ作述ヲ以テス、氏幸ニ諾スル有リ（會々府下ノ教員諸君ニメ同氏ニ此ノ學ノ講義ヲ依頼スル者多シ、蓋シ同氏ハ深ク心理ニ涉獵セラレシヿ、當時同氏ト共ニ螢雪ノ苦ヲ嘗メタル學士諸氏ノ傳フル所ナレバナリ、爾來二三ノ教育會ニ於テ其著ス所ニ就テ講述セラレタルニ、精致ニメ而モ解シ易キヲ稱セサル者無シ）、全部凡ソ十五章ニシテ、第一章ハ心理學ノ性質、區分、研究法ヲ總釋ス、次ノ三章ハ心理學ノ基本トスル心意ノ生理論、分解論、發育論ヲ説明ス、是レ特ニ此ノ學ヲメ我邦普通學ノ未タ深カラサルニ因テ心理ヲ解スルノ難キヲ防ク爲ニシタル者ニシテ、他書ニ就テ見ル可カラサル理論ヲ平易ニ説明スル者大タ多シ、次ニ章ヲ追テ注意、感覺、知覺、記憶、想像、概念、斷定、推理、感應、情操、意志、行狀、ヲ詳明ス凡ソ此ノ學ニ名アル大家ノ書ハ悉ク引用スト雖𪜈倍因氏心理學ハ既ニ三十年前ノ發兌ニ係リ、爾後新奇ノ發論モ亦多キヲ以テ、注意感覺以下ノ諸章ハ主トシテ正據ヲ昨年發兌ノサレイ氏教育適用心理學ニ取レリ、同氏ハ英國ケンブリッヂ大學校ウヰクトリヤ大學校及ヒ倫敦大學校ノ心理、道義、哲學ノ試驗官ニシテ、現今歐州第一等ノ心理學者トス、本書ハ全部ヲ八回以內ニ發兌シ、教科ノ用ニ便ニセンカ爲ニ、條目ハ四號活字ニシ、本文ヲ五號活字ニシ細字ヲ以註解及ヒ引書ノ丁數ヲ記シ、毎章必ス別目ヲ置テ教育ニ適用スル次第ヲ説明ス、實ニ本邦教育ノ大基本タルヘキ良書ナリ、

追白本書記載ノ事項ニ付講述者ニ御質問被成タキ御方ハ御通信次第御應答致シ候筈本書卷末ニ附記致シ置キ候間此段併テ廣告ス

東京日本橋通四丁目　牧野善兵衛

賣捌　千葉　立興舍

佛國女學士路易達爾克原著　伊藤重固君譯
東京大學教授櫻井省三君閲　山成哲造君校

西洋束髪秘傳 附 化粧秘傳　全一冊美本

密畫廿七入 定價六十錢郵税共六十四錢

此書は西洋に名高き佛國風の束髪及化粧の秘法を示すものにて種々の束髪を自身に爲し得る法を説明し其他髪の療治法を數多傳授せり又化粧術は我邦にて思付さる奇術多し御講讀の上御試驗あらんとを乞ふ

東京神田雉子町
大賣捌所　團々社支店

十九年二月廿七日發兌
團々珍聞五百三十三號目録

一 洒蛙説　明らめ方の秘訣
一 珍報　種々
一 狂畫　潮むき蛤の圖○火の本念太夫の圖
一 和漢欄　狂詩歌句都々一
一 出放題　考句の解答幷に新題
一 英和對譯　負惜みの官吏
一 内外奇譚　滑稽瀛車栗毛
一 一週要報　種々○東京各新聞社説表 第四回

發行所　東京神田雉子町　團々社
大賣捌　同　同　巖々堂
同　安藝國廣島大手筋一町目　早速社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

驛遞局認可

○小學教文雜誌
大形美製 一册二十頁　毎月三回發兌 定價一册四錢

欄ヲ分チテ三トナス曰ク文話曰ク文英曰ク文範文話ハ唐宋諸家ハ固ヨリ論ナク吾邦先輩ニ至ルマデ苟モ作文賦詩ヲ資スル者ハ一切網羅シテ選ス所ナシ文英ハ江湖靑年諸君ノ文詩歌ヲ揭載シ之ヲ改竄シ之ヲ批評シテ一ノ餘蘊ナカラシム文範ハ和漢古今ノ鴻儒碩學ノ文詩ヲ登錄シ一々文法詩格ヲ講明シテ作文賦詩ノ要ヲ知ラシム加之時々歐文ヲ揭ゲ之ニ和譯ヲ施シテ譯文ノ要ヲ領得セシム又連月文詩歌ノ題ヲ課シ遍ク諸君ヲシテ之ヲ作爲セシメ其優等ノ者ヘハ無料ニテ壹部宛拜呈ス其編輯ノ精選ナル改竄ノ懇到ナル實ニ文海ノ指針文山ノ一杖トモ謂フベキ好書ナリ

本紙代價表

部數	本誌郵税價	郵劵代用
五部	二十四錢	二十六錢
十部	四十七錢	五十二錢
二十部	九十錢	壹圓
三十部	壹圓三十錢	一圓四十三錢
壹年卅六部	壹圓五拾錢	一圓六十五錢

廣告一行代價

一行十九字詰	一日	二日以上五日迄	六日以上
自一行至十行	五錢	三錢	二錢五厘
自十一行至卅行	四錢	二錢五厘	二錢
卅一行以上	三錢五厘	二錢	一錢七厘

東京馬喰町貳丁目
發兌 興文社

○故事詳解
小牧櫻泉先生序 藤野海南先生序 松村南涯先生著

詩文用材 故事詳解 全一册 定價郵税共廿四錢 郵劵代用不苦

詩ヲ賦シ文ヲ作ルニハ典故ヲ解セザルベカラザルハ固ヨリ言ヲ竢タズ然ルニ世ニ典故ヲ解釋スルノ書甚タ少シ一二之アルモ粗漏杜撰概ヲ看ルニ足ラズ此書ハ南涯先生多年六經百家ノ書ニ就テ典故ヲ剔抉シ之ヲ乾坤時候等ノ部門ニ分チテ一々解釋ヲ施シタレバ典故ヲ搜索セント欲スル者ハ一タビ卷ヲ繙カバ地ニ俯シテ芥ヲ拾フヨリモ易カラン事實ニ文人韻士座右一日モ欠クベカラザルノ珍書ナリ

東京馬喰町貳丁目
發兌書肆 石川治兵衛

東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地
發行所 積文舍

持主兼印刷人 松本義弘
編輯人 山田常治

女學叢誌賣捌所

東京芝區愛宕町一丁目三番地 大賣捌所 修正堂
同 神田區淡路町 同 巖々堂
同 神田區雉子町 團々社
同 日本橋區新葭町 尾明堂
同 牛込肴町十七番地 活神堂
同 芝區愛宕下町二丁目 高槻堂
同 蠣殼町貳丁目 信文堂
同 本郷區本郷元富士町二番地 盛春堂閑田
同 本郷春木町貳丁目 解明堂
同 元數寄屋町壹丁目 東海堂
大坂府備後町四丁目 岡嶋支店
千葉縣千葉本町一丁目 立興舍
藝州廣嶋大手町一丁目 早速社
江州彦根西内大工町 新々堂
陸前國仙台大町四丁目 木村文助
越後長岡裏三之町 大橋書房

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY